View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by KANAGAWA University Repository

＜論　　説＞

イングランドの工業化と宗教：再検討

山　本　　通

目　　次

はじめに：本稿の課題
1．19 世紀前半の諸宗教グループ
　A）国教徒
　B）非国教徒
2．工業化と信仰復興
3．非国教徒の社会層構成
4．富と信仰

はじめに：本稿の課題

マックス・ヴェーバーは有名な論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の総括の部分で次のように言う。「プロテスタンティズムの世俗内的禁欲は，所有物の無頓着な享楽に全力を挙げて反対し，消費を，とりわけ奢侈的な消費を圧殺した。その反面，この禁欲は心理的効果として財の獲得を伝統主義的倫理の障害から解き放った。利潤の追求を合法化したばかりでなく，それをまさしく神の意思に沿うものと考えて，そうして伝統主義の桎梏を破砕してしまったのだ(1)」。ヴェーバーは続ける。「消費の圧殺とこうした営利の解放とを結び付けて見るならば，その外面的結果はおのずから明らかとなる。すなわち，禁欲的節約強制による資本形成がそれだ(2)」。しかもヴェーバーによれば，禁欲的プロテスタントたちが「富の『誘惑』のあまりにも強大な試練に対して，まったく無力だったことは確実である(3)」。

その証拠としてヴェーバーが引き合いに出すのは，メソディスト派創始者の一人ジョン・ウェズリーの次のような言葉である。「……宗教はどうしても勤労と節約を生み出すことになるし，また，この二つは富をもたらすほかはない。しかし，富が増すとともに，高ぶりや怒り，また，あらゆる形で現世への愛着も増してくる。……こうして宗教の形は残るけれども，精神はしだいに消えていく。……われわれはすべてのキリスト者に，できるだけ利得するとともに，できるだけ節約することを勧めなければならない。が，これは，結果において，富裕になることを意味する(4)」。

ウェズリーのこの文章の真意は，取得した富を博愛的な慈善に捧げるよう奨励することにあったのだが[5]，ヴェーバーは巧みにこの資料を利用して自説を補強している。こうして彼は，「宗教的生命に満ちた17世紀」の禁欲的プロテスタントの職業倫理から，宗教的な精神が抜け落ちて，18世紀には「独自の市民的な職業のエートス」つまり「資本主義の精神」が産まれた，という「倫理テーゼ」を提示する[6]。この理論は，単純であるからこそ解り易く，魅力的である。しかし，ウェーバーの「倫理テーゼ」の一つの証拠ともいうべき，ジョン・ウェズリーの観察には，どのような根拠があるのだろうか。

もちろん，社会科学の方法をもってしては，人々の信仰の篤さやその中身といった質的なものを知ることはできない。しかし，人々の教会出席率，諸宗派の信者数の動向，それぞれの宗派の社会構成の変化といった量的な数値を知ることはできる。そしてこうした量的な変化の観察を通して，我われは間接的に質的な変化を推測することができる。本稿は，18・19世紀イングランドの歴史統計学の研究成果を利用して，ウェズリーによる観察の妥当性，ひいてはヴェーバーの「倫理テーゼ」の妥当性を，検討しようとするものである。

1．19世紀前半の諸宗教グループ

先ず以下の検討の前提として，産業革命期（1760年頃～1830年頃）のイングランドの宗教界を概観しよう。この時期においてイギリス（連合王国）は「半・信仰告白国家 semi-confessional state」であった。「信仰告白国家」においては，王国の臣民は王国によって認定・支援される国定教会の礼拝・教義・規律を遵守するように期待されたのだが，名誉革命（1688年）の翌年に「信教自由法」が制定されて，非国教主義が許容されたために「半・信仰告白国家」の体制が成立したのである。イギリス（連合王国）にはイングランド教会，スコットランド教会，アイルランド教会の3つの国定教会があり，イングランド教会はイングランドとウェールズの住民の宗教生活を管轄した。

イングランドの人々の中でイングランド教会に帰依する者が「国教徒」，帰依しない者が「非国教徒」と呼ばれるが，「非国教徒」の中にはプロテスタント非国教徒とローマ・カトリック教徒，その他が含まれる。「その他」の中にはユダヤ教徒や理神論者などが含まれるが，いずれもごく少数派なので，本稿ではそれら取り上げない。

A）国教徒

国教徒が帰依するイングランド教会は，ピラミッド型の位階制によって統治された。その最高の統治者はイギリス国王であり，全国はカンタベリー大主教区 archbishopric とヨーク大主教区に分けられ，またその下にはイングランドで24の，ウェールズでは6の主教区 bishopric が置かれた。主教たちは貴族院議員の資格を持ち，彼らはそこで世俗的・宗教的な権威を保持した。また主教たちは，主教管区内の教会紀律を維持し，聖職者の叙任と信者の堅信のサクラメント（聖

奠）を執行し，聖職者を監督するために管区内の小教区を定期的に訪問する責任を持っていた。主教区の下にはイングランドとウェールズあわせておよそ 11,000 の小教区があり，それらは司祭ないし副司祭によって管理された。司祭の主な仕事は小教区民の霊的・道徳的な教育であった。司祭の生活は，「十分の一税 tithe」，教会の不動産の賃貸料，そして教会の座席使用料収入によって賄われた(7)。

イングランド教会の教義は，エリザベス 1 世統治下の 1563 年に 39 箇条からなる「宗教条項」に纏められた。これは体系的なものではなく，聖書と理性と教会の伝統に基づく包括的な信条集であり，多様な解釈の余地を残す柔軟なものであった。したがってイングランド教会は，プロテスタントのさまざまな神学を包み込むことができた。実際，16 世紀末から 17 世紀初めにはイングランド教会の聖職者の主流はカルヴァン主義者であったが，1620 年代には「ロード主義者」がその要職を占めた。1660 年の王政復古の後にはイングランド教会の主流は「ロード主義」の高教会派であったが，1688 年の「名誉革命」以後，イングランド教会の要職は「低教会派」によって占められた。しかし，1760 年以後は「高教会派」が勢いを取り戻し，さらにその後は「福音主義派」が勢力を伸ばした(8)。

時代を下ってみると，1830 年代には，典礼のサクラメント（聖奠）を重んじてカトリックに接近しようとするオックスフォード運動が高教会派の中から生まれた。さらに下って 1880 年代には，聖書の批判的研究を梃として合理主義神学が台頭し，また同じ頃，これとは別にキリスト教社会主義もイングランド教会の中から生まれた。このように，アングリカンは多様な神学思想の運動を生み出すことができたという意味で，ローマ・カトリック教会と同様にきわめて「懐の深い」教会であった。

イングランド教会は「国民教会」としての実質を備えていたので，国内の政情を安定させ，国民の福祉を担う役割を果たした。小教区の説教では，権力への無抵抗と従順が説かれた。小教区司祭と有産小教区民からなる小教区委員会 parish vestry は小教区民から徴収した教会税によって，貧民救済，道路や橋の整備，学校への金銭的補助を行なった。小教区委員は小教区内の秩序維持のための司法・行政機能も果たしたが，聖職者自身がしばしば地元の司法行政職を兼務していた(9)。

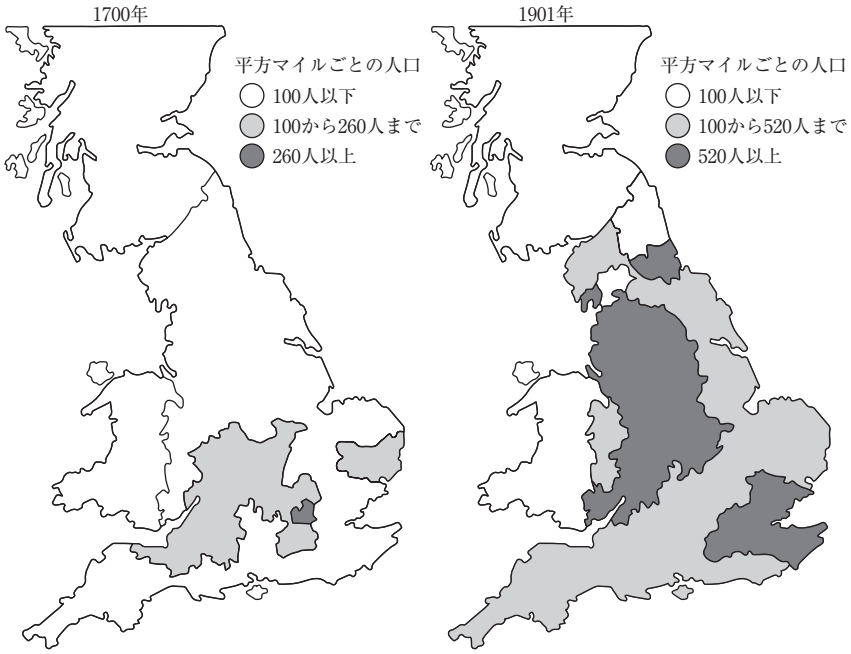
しかしながら，イングランド教会の体制は 19 世紀初めまで，弱体化の一途をたどった。その原因の一つは聖職者の堕落である。それは聖職兼任 pluralism や聖職者不在小教区の状況にも現れた。1813 年の主教報告書によれば，イングランド教会の聖職者の 3 分の 1 は複数の小教区の司祭を兼任していた。小規模な小教区であれば複数を兼任しなければ聖職者の生計が成り立たないという事情もあったが，多くの場合，聖職兼任は単に聖職者が自らの収入を増やすために行なわれていた。主教区の財政状態はまちまちで，年収数千ポンドの主教もいれば，数百ポンドの年収に甘んじる主教もいた(10)。さらに，教会の中にはさまざまな閑職があり，貴族的な生活を享受する聖職者もいた。

他方，1831年には，聖職者が小教区の範囲内に住んでいない事例が過半数を占めていた。司牧の不備を補うために，しばしば代理司祭curateが雇われたが，彼らは重い職務を任されたにもかかわらず，その待遇は劣悪であり，代理司祭は「教会の農奴」とさえ形容された。また，聖職推薦権は売買される権利となっており，その半数を握っていた地主たちは，自らの利害のためにしばしば不適切な人物を推薦した(11)。聖職者の質の低下は以前から指摘されていた事態であるが，これを改善するための動きは，18世紀末に「高教会派」の主教たちによって試みられた。彼らは主教区内の巡回をしばしば行ない，司祭たちへの指導を強化し，典礼を刷新し，また，聖職者の過少状態を改善するために田舎司祭rural deanery制度を復活させた(12)。

イングランド教会体制の弱体化のもう一つの原因は，小教区システムの硬直性にあった。中世末期に設定された小教区の境界線は，19世紀初めまで，ほとんど変更されてこなかった。しかし，18世紀初めからの急速な工業化の中で，イングランドでは人口革命が進行するとともに，人口の地域的分布も大きく変化した。イングランドとウェールズの総人口は1741年には約600万人であったが，その100年後の1841年には約1,600万人に増加していた。そして工業地域，特に商工業の中心地に人口が集中していった。その結果，イングランドの小教区の構造は人口分布と全く適合しなくなっていた。このことを，図で確認しよう。

［図1］は1700年と1901年のイングランドの地域別人口密度を示したものである。これによれば，人口の増加は首都ロンドンとその周辺諸州，北部諸州，そしてミッドランド西部などの工

［図1］　1700年と1901年の地域別人口密度

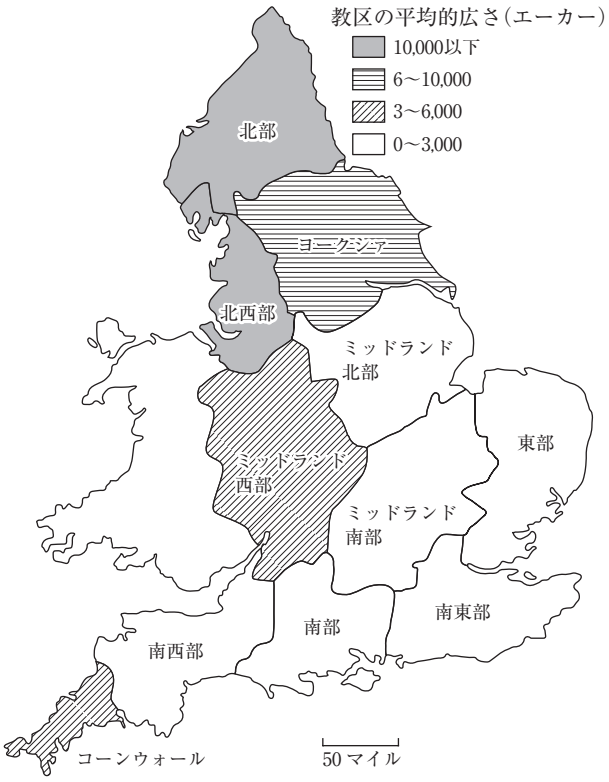


出典：Cook, Ch. and J. Stevenson, 1987, p. 93.

業地帯で著しかったことがわかる。次に1811年の地域ごとの教区の平均サイズを示した［図2］によれば，イングランド教会の小教区の規模は，東部，南部，南西部といった農業地域で小さく，人口増加の激しい北部やミッドランド西部では広かった。その結果，多くの小教区教会は教区民を全く収容できなくなっていた。ロンドン，マンチェスター，リヴァプールといった大都市では，多くの小教区の人口が2万人に達していた。極端な例を挙げれば，ロンドンのセント・パンクラス小教区には1815年には約5万人が住んでいたが，その小教区教会には200人分の座席しかなかったのである[13]。しかし，小教区教会の境界線を変更するためには煩雑な手続きが，新しい教会の建設には巨額の費用が必要であり，いずれの処分にも国会の制定法が必要であった。そのために，政府は小教区改革に手をこまねいていた。

イングランド教会の改革が本格化したのは，それが存亡の危機にさらされた1830年代においてであった。1828年に非国教徒を差別する審査法と都市自治体法が廃止され[14]，翌年には「カトリック解放法」によってカトリック教徒に市民権が与えられたが，そうした動きに続いて，国定教会制そのものの廃止を要求する「国教会制廃止運動 Voluntary Campaign」がスコットランドで起こり，イングランドでは急進派や非国教徒によって推進された。これに対してイングラン

［図2］　地域ごとの英国国教会の教区の平均サイズ（1811年）



出典：Gilbert, A. D., 1976, p. 101より。

ド教会の指導者たちは，イングランド教会の諸問題を明らかにして，その本来の使命を果たすべく，政府の行動を要求する国民的請願運動を展開した[15]。

ピール首相の下で1834年に組織された教会委員会は，翌年から1840年までに3つの報告書を政府に提出し，国会はそれに沿って「国定教会法」「聖職兼従禁止法」「主教座聖堂司祭・参事会委員法」の3つの法律を成立させた。これらによって，主教職の収入はほぼ均等化され，聖職に関する多くの閑職が廃止され，主教座聖堂参事会員聖職禄の給付は廃止された。こうして生み出された財政的余剰は，北部を中心に新しい主教区や小教区を設立するために使われた。また，大規模な募金運動によって集められた資金が，代理司祭の給与補助や教会建設に使われた。1831年から1841年までの10年間には，全国で実に667もの教会が建築された[16]。

マックス・ヴェーバーの「倫理」テーゼとの関係で，イングランド教会の国教徒について注意するべきは，彼らが「世俗内禁欲」と無縁ではなかったことである。私が別稿で明示したように，王政復古期と名誉革命期の「広教主義」聖職者たちは，有徳な生活が現世における幸せや豊かさの前提であるとして，徳の追求を勧めた[17]。またピューリタン革命期の「律法無用主義」の広がりに危機感をおぼえた聖職者たちは「道徳主義」的な立場から「清らかな生活」の実践を奨励した。また，ウィリアム・ローに代表される18世紀前半の「高教会派」聖職者たちは，カトリック修道僧のような禁欲的な生活を世俗内で実践するべきことを説いた。特に注目に値するのは，これらイングランド教会の聖職者たちの厳格で「道徳主義」的な諸著作が，ベストセラーとして，広く長く一般信者の間で読み継がれたことである[18]。

B）非国教徒

プロテスタント非国教徒の中には，オールド・ディセント，ニュー・ディセント，その他が含まれる。「その他」の中にはルター派，ユグノー，モラヴィア派などが含まれるが，それらについてはここでは取り上げない。

ニュー・ディセントとは，18世紀末にイングランド教会から分かれて成立したウェズレイアン・メソディスト，およびそこから分かれて成立したメソディスト諸派である。メソディズムの起源は，チャールズ・ウェズリーが1730年代に創設したオックスフォード大学神学生たちの「神聖クラブ」にある。彼らはイングランド教会「高教会主義者」のウィリアム・ローの「道徳主義」の立場から，毎朝その日の勉強と祈祷と善行の計画を厳密に計画して実行したので，「メソディスト」と綽名された。

しかし，ジョンとチャールズのウェズリー兄弟はモラヴィア派の伝道師の影響により，またジョージ・ホィットフィールドは独自に，回心体験を経て「信仰のみによる救い」に目覚め，その教えを広めるために精力的な伝道活動を展開した。ホィットフィールドは回心体験を通してカルヴァン主義的な予定説を信奉し，イギリスと北アメリカ植民地において生涯を伝道活動に捧げた。しかし彼は，組織形成にはほとんど興味を持たなかったので，彼の宣教活動によって回心し

た信者たちは，後には，ほとんどが会衆派か特殊恩寵浸礼派の群れに加わった[19]。

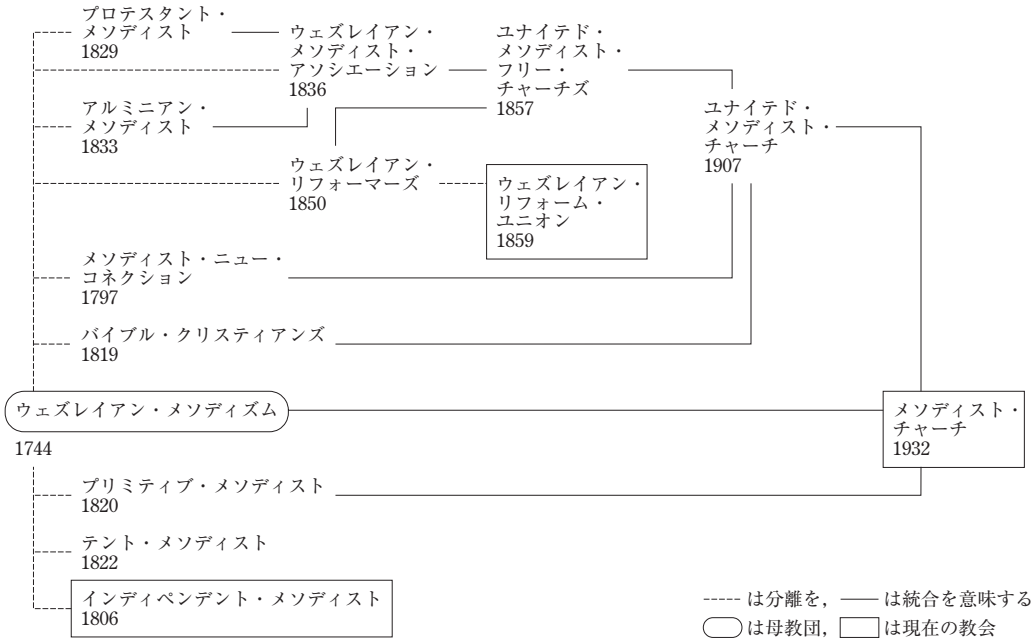
ジョン・ウェズリーは普遍救済説を支持して，カルヴァン主義的な予定説を嫌悪した。彼は40年に亘って毎年イングランドを巡回して，全国に福音を伝道した。ウェズリーはイングランド教会の正規の聖職者の資格をもって宣教活動に従事したが，彼が採用した野外説教，巡回説教，俗人説教師はイングランド教会の慣例に反するものであったので，「高教会主義」聖職者たちの不興を買った。しかし，ウェズリーが展開した福音主義信仰復興運動の成功はイングランド教会に大きな衝撃を与え，その内部に，メソディスト派に同調する「福音主義」派の運動を生み出した[20]。

しかしウェズリーは，その司牧の理念を深く追求した結果，イングランド教会内部に，もう一つの宗教グループを形成することになった。彼は回心を体験した人々がモラヴィア派のように「律法無用主義」に陥ることを恐れた。そのために彼は，信者を「クラス」と呼ばれる12人ほどの相互教化グループに組織し，「全き聖化」を目指して生活を方法的に規律化するよう導いた。そして，「クラス」を束ねた地域的な組織である「ソサイエティー」を基礎に，ウェズリーは全国的なピラミッド型の教会組織を構築した。しかしながらウェズリーは，イングランド教会から分離することは考えていなかった。メソディストの信者は，国教徒として日曜日の教区教会の朝拝に与り，午後か夕方にメソディストの集会に参加するよう奨励された[21]。

国王とイングランド教会へのウェズリーの忠誠心は，生涯変わることがなかったが，彼が1791年に死去したのちに，メソディストは正式にイングランド教会から分離した。すなわち，ウェズレイアン・メソディスト・コネクション（Wesleyan Methodist Connection）が成立し，その中央行政機関としてウェズレイアン・メソディスト・コンファレンス（Wesleyan Methodist Conference）が成立したのである。ジョン・ウェズリーの後を継いでこのメソディスト正統派を指導したジェイビス・バンティングは，教会の中央集権的官僚制機構の形成に着手し，また牧師の巡回説教や俗人の説教を禁止した。

このような正統派の指導者たちの反動化に反発して，メソディスト正統派からの分離の動きが次々に起こった。メソディスト・ニュー・コネクション（Methodist New Connection）（1798年成立）バイブル・クリスチャンズ（Bible Christians）（1810年成立），プリミティヴ・メソディスト（Primitive Methodists）（1812年成立）といった数多くの分派が成立した。これらの分派活動の原因は，教義上の問題ではなく，組織理念の問題にあった。［図3］は英国のメソディスト諸派の分離と統合の歴史の概念図である。一見してわかるように，19世紀初めに分離独立した諸派は，19世紀後半になるとしだいに統合していく。現存しているのは，メソディスト・チャーチ（Methodist Church），ユナイテッド・メソディスト・チャーチ（United Methodist Church），およびウェズレイアン・リフォーム・ユニオン（Wesleyan Reform Union）の3グループである[22]。しかし，このような激しい分離運動にもかかわらず，メソディスト諸派の全体としての会員数は急激な増加を続け，1850年代には約50万人（全人口の約4%）に達し

［図3］　メソディストの諸分派



出典：Currie, R., 1968, p. 54 より作成。

た[23]。

オールド・ディセントとは，1662年に成立した「礼拝統一法」を遵守しなかったクリスチャンであり，その中には長老派，会衆派，特殊恩寵浸礼派，普遍恩寵浸礼派，クエイカー派などが含まれる。王政復古期においては彼らの礼拝集会は非合法的なものとみなされ，そのために治安当局から迫害されてきた。しかし，1689年の「信教自由法」は迫害を終わらせ，彼らは，礼拝集会所の所在を主教ないし治安判事に届け出て認可を受けることによって，自由に礼拝集会を持つことができるようになった。

会衆派（Congregationalists 独立派，組合協会派とも呼ばれる）は，「回心した真の信仰者」だけから成る自治的な信仰共同体であり，自らの回心体験と恩寵の働きを説明できる人だけが会員資格を得た。カルヴァン主義の「二重予定説」を信奉する「ピューリタン・セクト」であり，ピューリタン革命においては急進派の先鋒に立った。会衆派のセクトとしての立場は1658年の「サヴォイ信仰・秩序宣言」によって明らかにされたが，全国的な組織の絆は緩やかで，個々の衆会の独立性が強かった。

特殊恩寵浸礼派（Particular Baptists）も，「二重予定説」を信奉し「回心した真の信仰者」だけから構成されるカルヴァン主義の「セクト」であったが，「成人洗礼」という通過儀礼の執行によって信者を信仰共同体に迎え入れるところに，会衆派との違いがあった。

彼らは共に，「二重予定説」と「回心した真の信仰者」のみから成る教会の思想のゆえに，自

らの「救い」を自他ともに証明するためにヴェーバーのいわゆる「世俗内禁欲」を実践した。したがって会衆派と特殊恩寵浸礼派の「世俗内禁欲」の実践は，ヴェーバーの「倫理」テーゼを検証するための格好の証拠となりそうである[24]。しかし，彼らの信者数はイギリス資本主義の発展に影響力を与えるためには，あまりにも少なかった。1710 年代後半のイングランドにおける会衆派と特殊恩寵浸礼派の信者数は，それぞれ約 6 万人と約 4 万人で，総人口の 1% と 0.7% 程度だったからである[25]。

王政復古期（1660～1688 年）において彼らが強く主張し続けてきた「信教の自由」が 1689 年に実現したにもかかわらず，彼らは「二重予定説」を信奉していたために，福音伝道に消極的であった。誰が永遠の救いに予定され，誰が永遠の遺棄に予定されているかを「聖徒」は判断できる，という思い上がりが，その原因であった。「神に見捨てられている」と彼らが見做す人々に福音を宣伝えることは無意味だ，と彼らは考えていた。彼らが伝道についての姿勢を変えるためには，18 世紀の信仰復興運動の波に飲み込まれて，「予定説」についての考え方を転換する必要があったのである。

17 世紀初めに誕生した普遍恩寵浸礼派（General Baptists）は，回心した人々に「成人洗礼」を施して教会共同体に迎え入れたが，特殊恩寵浸礼派とは違って「普遍救済説」を信奉した。宗教思想の点で大陸の「再洗礼派諸派」に最も近いのは，普遍恩寵浸礼派であり，その担い手の多くは，17 世紀から 19 世紀に至るまで常に，零落していく職人層や下層農民であった。

1640 年代のイングランド内乱の状況下で開催された「ウェストミンスター聖職者会議」は，イングランドに長老制の国民的教会を建設するべきことを国会に答申したけれども，過激派諸セクトが権力を握った共和制期には，これはほとんど実行されなかった。長老派（Presbyterians）は長老制国民教会の理想を追い続け，王政復古期にもイングランド教会の中に包摂された形での長老教会制の設立を目指した。カルヴァン主義者でありながら，長老派が国民教会の建設を追求したのは，彼らが「予定説」を聖アウグスティヌスや宗教改革者カルヴァンと同じように捉えたからである。つまり彼らは，「神の予定」を人間が知ることは不可能なので，福音宣教と司牧が全ての人々を対象に行われるべきだ，と考えたのだ。しかし，名誉革命後の「信教自由法」の成立によって，長老教会制建設の夢は打ち砕かれた。そこから，イングランド長老派の変容が始まる。

諸セクトにおいては信者たちが聖職者を選んだが，長老派の聖職者は教会の受託者団と有力なスポンサーによって決められ，その選考の際に重視されたのは高い神学的教養であった。長老派教会においては，聖職者は宣教，司牧，規律の執行などの教会管理を担当したが，いったん職に就いた聖職者を会衆が解雇することはできなかった。このような仕組みの下で，イングランド長老派の聖職者たちの支配的な神学思想は，18 世紀の最初の 70 年ほどの間に，バクスター主義からアルミニウス主義へ，アルミニウス主義からアリウス主義へ，アリウス主義からソッツィーニ主義へと地滑り的に変容した。そして，ソッツィーニ主義の指導者であり化学者でもあったプ

リーストリーは1779年に「長老派」の名称を「ユニテリン」に改称したのである。この間に，異端的聖職者を嫌う信者の多くが個別に，あるいは集団的に教会から離れて，多くの場合，会衆派の教会に流れ込んでいった。こうして，イングランド長老派（ユニテリアン派）の信者数はこの1世紀間に激減していった[26]。

クエイカー派は1650年代に，ピューリタン運動の中から生まれた聖霊主義のセクトである。ピューリタン革命の成功にこの世の終末の到来を予感した「聖者」たちの運動として始まったが，「王政復古」後の非国教徒迫害によって，たちまち存亡の危機に追い詰められた。1660年代に全国的な教会業務集会の組織が形成され，教祖フォックスのカリスマによってこの窮地を乗り切ったが，「信教自由法」の公布以後，クエイカー派は衰退の一途をたどった。彼らは「内なる光」の導きを最大限に重視し，聖書を軽視し，聖職者の制度を否定した。したがって，静寂主義者たちが教団を指導した18世紀前半には，宣教と司牧の活動が停止した。1710年代には信者の9割は，クエイカー信者の子弟によって占められ，教会業務集会が彼らのピューリタン的な生活倫理規則の遵守を監督した。こうして18世紀には，クエイカー派は宗教運動というよりは，巨大な血族集団の倫理実践運動に変化してしまった。

クエイカー派の信徒数は17世紀末に約6万人を数えたが，18世紀に静寂主義の指導者たちに支配されて教勢が衰え，1800年頃にはその信徒数は約2万人までに減少した。信徒数の減少に歯止めがかかったのは，19世紀初頭からJ・J・ガーニーが福音主義の立場から宣教活動を始める後のことであるが，信徒数はその後も増加しなかった[27]。

2．工業化と信仰復興

イングランドの1700年頃から1850年頃までの各宗教グループの信者数の変化は，1710年代後半の調査をジョン・エヴァンズがまとめた記録や，1851年に政府が実施した宗教国勢調査 religious census の報告書などを通して，推計できる。

1715年にロンドンの（長老派，会衆派，浸礼派の）3教団委員会 Committee of Three Denominations はイングランドとウェールズの全ての会衆の所在地，その聖職者の名前，その会衆の数と質などについての調査を開始した。これは，1715年に制定された「教会分裂阻止法 Schism Act」の早期廃止のために実施されたものであった[28]。調査は1718年に完了し，長老派の聖職者であり，3教団委員会書記であったエヴァンズが集計したリストが現存している。これに同時期のクエイカー派についての資料の検討を加えて，ワッツは［表1］をまとめた[29]。この時期の非国教徒のうちの最大のグループは長老派であり，その信者数はイングランド全体で約18万人であった。また，プロテスタント非国教徒全体の信者数は約34万人であり，それは当時のイングランドの総人口の約6%を占めたに過ぎない。

イギリス政府は，10年ごとの国勢調査に合わせて，1851年にイングランドとウェールズの諸宗派の教会座席数や住民の日曜礼拝出席率を調べるために宗教国籍調査を行なった。これは，イ

ングランド教会からの度重なる教会建築増加の要求に応えて行われたが，以下に明らかにするように，イングランド教会にとっては不都合な事実が明らかになったために，最初で最後の調査となった。調査の総責任者に選ばれたロンドンの法廷弁護士ホラス・マンは，1851 年 3 月 30 日（日曜日）における全国の教会の礼拝出席者数を聖職者に報告させ，さらに幾つかの補助手段を使って，各派の会衆数と礼拝出席信者数をまとめた(30)。ワッツがマンの集計数に若干の修正を加えたものを簡略化したものが［表 2］である(31)。

［表 2］からは，幾つかの大変興味深い事実が明らかになる。第 1 に，1851 年においてイングランド教会ないし非国教徒の教会（堂）の礼拝に出席した人は合わせて 39.19% に過ぎなかった。もちろん老人，孤児，病人や交通機関の仕事に従事する人は主日礼拝に出席できない。しかし，それらの人々を差し引いても，主日礼拝の出席率は全体の半分程度だった。これに関して，マンとイングリスは，労働者大衆がほとんど主日礼拝に出席しなかったのだ，と結論づけている(32)。第 2 に，主日礼拝出席者のうち半数近くが非国教徒であった。1851 年においては，イングランドの住民のうち 17.02% は非国教徒だったのである。これは，エヴァンズ・リストを基にする集計結果，つまり 1710 年代後半における非国教徒の比率 6.21% と比べると，非常に大きな増加である(33)。

そこで，1710 年代後半と 1851 年における非国教徒のグループ別の信者数の変化を見てみよう。［表 3］は［表 1］と［表 2］の数値を比較したものである(34)。この表からも，幾つかの興味深い事実が現れる。第 1 に，1710 年代後半に存在しなかったメソディスト派が 1851 年に登場し，そのうち，アルミニウス主義メソディストが約 149 万人，全人口に対する比率で 8.8% に達することである。また，会衆派（独立派）はこの間に信者数を 11 倍に，浸礼派（両派をふくむ）は 8.4 倍に増加させた。逆に，長老派（後のユニテリアン派）は半分以下に，クエイカー派は約 3 分の 1 に信者数を減少させた。

1710 年代後半と 1851 年の間には，信者数に関する信頼できる統計資料が無い。しかし，非国教徒の衆会の数については，浸礼派聖職者ジョサイア・トンプソンが 1773 年に纏めた調査の集計結果が利用できる。これを，1710 年代後半のエヴァンズ・リストおよび 1851 年教会国勢調査で明らかになった非国教徒各派の衆会の数と比較して見せたのが，［表 4］である(35)。［表 4］で明らかになることは，1710 年代後半と 1773 年の間に非国教徒の衆会の数が全体としてわずかに減少している，という事実である。非国教徒の衆会の数が約 10 倍に増えたのは，1773 年と 1851 年の間，つまりいわゆる産業革命期においてであった。

1851 年にはイングランドには非国教徒の衆会は 17,019 存在したが，そのうちの 10,474 はアルミニウス主義メソディストの衆会であった。この種の衆会は 1773 年には存在しなかった。そしてまた，この間に会衆派と浸礼派の衆会が爆発的に増加する傾向は，それらのグループの信者数の変化と一致する。では，1773 年と 1851 年の間に何が起こったのか。それは，「福音主義信仰復興運動の展開」である。

［表1］ 18世紀初頭イングランドのプロテスタント非国教徒

	推定信者数	対全人口比
長老派	179,350	3.30
会衆派（独立派）	59,940	1.10
特殊恩寵浸礼派	40,520	0.74
普通恩寵浸礼派	18,800	0.35
クエイカー派	39,510	0.73
総計	338,120	6.21
全人口	5,441,670	

出典：Watts, 1978, p. 270.

［表2］ 1851年のイングランド主日礼拝出席者教派別推定数

	出席者数	対全人口比
Independents	655,935	3.88
Baptists	499,604	2.95
Quakers	16,783	0.10
Unitarians	34,110	0.20
Presbyterian Church in England	28,263	0.17
United Presbyterian Church	21,817	0.13
Wesleyan Methodists	924,140	5.46
Methodist New Connexion	61,937	0.37
Primitive Methodists	329,867	1.95
Bible Christians	48,015	0.28
Wesleyan Methodist Association	61,527	0.36
Wesleyan Reformers	62,164	0.37
Independent Methodists	1,544	0.01
Calvinistic Methodists	19,270	0.11
Lady Huntingdon's Connexion	21,942	0.13
Moravians	7,212	0.04
New Church	7,503	0.04
Brethren	6,894	0.04
Other Protestant Nonconformists	70,016	0.41
All Nonconformists	2,878,543	17.02
Church of England	3,415,861	20.19
Church of Scotland	8,692	0.05
Roman Catholics	288,305	1.70
Catholic and Apostolic Church	4,908	0.03
Mormons	19,792	0.12
Other Christians	2,437	0.01
総数	6,618,538	39.13
総人口	16,915,820	

出典：Watts, 1995, p. 28.

［表 3］

	1715 年～1718 年の信者数	対全人口比（%）	1851 年の信者数	対全人口比（%）
会衆派（独立派）	59,940	1.1	655,935	3.88
浸礼派（バプテスト）	59,320	1.09	499,604	2.95
クエイカー	39,510	0.73	16,783	0.10
長老派とユニテリアン	179,350	3.3	84,190	0.50
アルミニウス主義メソディスト		—	1,489,194	8.80
カルヴァン主義メソディスト		—	19,270	0.11
レディー・ハンティンドン派		—	21,942	0.13
モラヴィア派		—	7,212	0.04
その他		—	84,413	0.50
プロテスタント非国教徒全体	338,129	6.21	2,878,543	17.02
全人口	5,442,670		16,915,820	

出典：Watts, 1995, p. 29.

［表 4］　1715–18，1773，1851 年のイングランドの非国徒の会衆数

	1715–1718	1773	1851
Presbyterian	637	741	142
Unitarian	—		202
Independent	203		2,604
Particular Baptist	206	378	2,347
General Baptist	122		
Seventh-day Baptist	5	3	2
Quaker	672	563	363
Wesleyan Methodist	—	—	6,151
Other Arminian Methodist	—	—	4,323
Other Nonconformist	—	—	885
総数	1,845	1,685	17,019

出典：Watts, 1995, p. 23.

すでに述べたように，メソディスト派の聖職者と俗人宣教師たちは，イングランド全土を旅しながら，教区教会や教会堂だけではなく（聴衆が多い場合には）野外でも宣教活動を展開して，「信仰のみによる救い」を説いていった。そして，この教えによって覚醒し回心した人々が「律法無用主義」に陥らないように，メソディストの指導者たちは彼らを「クラス」という自治的な相互教化の組織に纏めて，ヴェーバーのいわゆる「世俗内禁欲」を実践させたのである。

また，会衆派と特殊恩寵浸礼派は，福音主義信仰復興運動の展開に触発されて，ゼクト型の「回心し，生まれ変わった者だけが本当の教会員である」という教会理念を，捨て去った。また，偏狭な「二重予定説」を打ち捨てて，福音を聞いた経験のない人々に福音を伝えるべく，巡回説教や野外説教，さらには海外伝道に乗り出していった[36]。そして 19 世紀の間に信仰覚醒運動を通して信徒数を急激に増大させると，次第に中央集権化された教会行政組織を発展させて，いわゆるデノミネーション型の宗派に変容していった[37]。

それでは，メソディスト諸派，および会衆派と特殊恩寵浸礼派は，イングランドのどのような地域で新しい信者を獲得していったのだろうか。この問題についての一つの解答はロバート・カリーのテーゼである[38]。カリーによれば，会衆派と特殊恩寵浸礼派はイングランド教会が強力であった地域で，国教徒を引き抜くことによって信者数を増やした。それに対してメソディスト派は，イングランド教会が福音伝道をおろそかにしてきた地域で伸長した。前述のように，工業化の進展によって18世紀に新しい工業地域や商業都市が生まれて，イングランドの人口分布は急速に変化した。しかし，イングランド教会は19世紀初めまで，その事態にほとんど対応できなかった。イングランド教会が聖職者と教会を提供できなかった人口急増地域に，巡回伝道や野外説教を実践するメソディズムが浸透した，というのである。

ワッツはカリーのこのテーゼを，資料の検討を通して修正した。彼は1851年の宗教国勢調査の主日礼拝出席者の割合の数値を624地域について纏めた[39]。そしてイングランド教会の地政学的状況についての知識を基にして，カリーのテーゼを宗派ごとに，また地域ごとに検討した。ワッツの結論は次のようである。「会衆派と特殊恩寵浸礼派およびメソディストは，人口革命と産業革命によってもたらされた人口の移動に対してイングランド教会がその組織 machinery を適合させることに失敗したことから，ある程度恩恵を受けた。しかし彼らは，イングランド教会によって既に地ならしが行われていた地域でも成長した[40]」と。

ワッツの結論の後半部分は，彼がその前著において論証したテーゼと適合的である。ワッツによれば，18世紀のイングランド教会においては厳格な「道徳主義」が説かれた。しかし，信仰篤い真面目な国教徒はその厳しさによって，精神的に追い詰められていく。福音主義信仰復興運動が説いた「信仰のみによる救い」の教えは，彼らを道徳主義の「宗教的テロリズム」から解放した，というのである[41]。元来イングランド教会が聖職者と教会を適正に提供できていた地域で1851年の主日礼拝出席率が高く，そのうちに占める非国教徒の比率が高いという傾向がみられることは，ワッツのテーゼを支持する証拠である。

ワッツの結論部分の前半部分については，やや詳しく説明しよう。［表5］は，1851年の宗教国勢調査の624地域の主日礼拝出席者の割合の数値を州ごとに集計したものである[42]。［表5］によれば，イングランドとウェールズで，1700年において1教会あたりの人口が1,000人を超える州は4つしか存在しなかった。それは大きいものから順にロンドンを含むミドルセックス州，サザークを含むサリー州，ノーザンバーランド州，そしてダラム州であった。そして，他の多くの州の1教会あたりの人口は大体500名前後であった。ところが，1801年には1教会あたりの人口が1,000人を超える州は12に増加する。これら12の州のうちの6州はメソディズムの勢力が強く，且つまた，工鉱業が発展していた。すなわち，綿工業が発展したチェシャー州，金属鉱山業のコーンウォール州，繊維工業のダービーシャー州，炭鉱業のダラム州，金属加工業のスタッフォードシャー州，毛織物工業のヨークシャー州西部（ウェスト・ライディング）である。

［表 5］　イングランド教会の 1 教会あたりの人口

州　名	1801 年以前に建てられた教会数	1 教会あたり人口	
		1700 年	1801 年
Bedfordshire	107	511.8	611.4
Berkshire	141	541.0	799.3
Buckinghamshire	161	518.1	688.7
Cambridgeshire	122	663.5	755.7
Cheshire	130	859.2	1,522.1
Cornwall	150	779.8	1,295.2
Cumberland	125	541.8	967.8
Derbyshire	156	664.9	1065.9
Devon	341	742.4	1038.0
Dorset	221	405.2	538.5
Durham	76	1,125.0	2,177.4
Essex	320	529.9	730.2
Gloucestershire	294	564.5	880.3
Hampshire	286	435.9	792.5
Herefordshire	203	351.9	453.4
Hertfordshire	113	678.1	891.1
Huntingdonshire	79	485.1	490.7
Kent	341	566.9	930.9
Lancashire	218	899.6	3,184.4
Leicestershire	205	429.7	654.8
Lincolnshire	495	389.1	434.8
Middlesex and London	162	3,587.5	5,211.4
Monmouthshire	106	275.5	443.7
Norfolk	611	382.1	461.7
Northamptonshire	237	490.9	573.7
Northumberland	99	1,228.9	1,637.5
Nottinghamshire	186	427.9	778.7
Oxfordshire	181	480.3	625.0
Rutland	42	371.0	401.9
Shropshire	222	514.4	779.2
Somerset	417	482.2	677.4
Staffordshire	172	654.4	1,434.8
Suffolk	443	416.2	490.2
Surrey and Southwark	113	1,489.9	2,456.9
Sussex	241	420.0	682.1
Warwickshire	177	567.9	1,213.8
Westmorland	63	471.1	681.7
Wiltshire	241	508.9	792.6
Worcestershire	198	512.2	726.2
Yorkshire, East Riding	205	712.9	681.5
Yorkshire, North Riding	206		792.6
Yorkshire, West Riding	292		1,997.7
North Wales	272	524.6	954.9
South Wales	497	336.1	601.7
総　数	9,667	595.0	917.9

出典：Watts, 1995, pp. 44–45.

しかし，他の6州でのメソディストの比率はそれほど高くない。その内のロンドンを含むミドルセックス州とマンチェスターを含むランカシャー州は，そもそも主日礼拝出席者全体の割合自体が極端に低い。前者は27%であり，後者は32.4%である。これは，大商業都市の住民の多くが主日礼拝のために教会（堂）に行かなかったことを意味している。

なお，［表5］は1851年において特定の諸州で，会衆派（独立派）と浸礼派の勢力が強かったことを示している。それらの州は，すでに17・18世紀において，これらのセクトの地盤であった。詳しく言うと，イースト・アングリアのエセックス州とサフォーク州，ベッドフォード州，ハンティンドン州，南北ウェールズとモンマスシャー州では会衆派（独立派）の信者が比較的多く，中部のハンプシャー州，南西部のウィルトシャー州やグロウスターシャー州では特殊恩寵浸礼派が比較的多かった。彼らの場合は，すでに確保した地域的地盤の上で新たな信者を獲得した，と言えそうである。

3．非国教徒の社会層構成

19世紀の中頃から1970年頃まで，非国教徒と外部の観察者たちの多くは，非国教主義がブルジョワ的な宗教であり，労働者大衆にはほとんど浸透しなかった，と主張してきた(43)。しかし，その定説には確固たる根拠が無かった。

統計的資料に依拠して非国教徒諸派の社会層構成を推定したアラン・ギルバートの1967年の研究成果は，イギリス宗教社会史研究にとって画期的な意味を持つものである。彼は1836年に生誕・結婚・死亡民間登録所Civil Registry of Birth, Marriage and Deathに保管されるようになった非国教徒の記録を調査した。彼はこれを，パトリック・カフーンによる1806年のイギリスの国民所得分析の数値と比較した。その結果を簡略化したものが，［表6］である(44)。そこから彼は次のように結論づける。「福音主義非国教徒の共同体の中での商人tradesmen，貿易商merchants，製造業者manufacturersの割合は社会全体のそれらの割合とほぼ同じであり，農民farmers（借地農と自営農）と労働者labourersの割合はかなり低いけれども，［福音主義非国教

［表6］　19世紀初頭イングランドにおける職業構成

	社会全体	非国教徒
貴族	1.4%	0.0%
大商人と製造業者	2.2	2.2
小商人	6.2	7.1
借地農と自作農	14.0	5.3
手工職人	23.5	59.4
鉱夫など	2.5	6.6
労働者	17.0	10.8
その他	33.2	8.6
	100	100

出典：Gilbert, 1976, pp. 63, 67.

徒の中で……山本の挿入］手工職人 artisans が占める割合は［社会全体の中に手工職人が占める割合の……山本の挿入］2 倍から 3 倍である[45]」と。

私はアーティザン artisan を仮に「手工職人」と訳したが，これは社会層構成のための学術用語ではなく，当時一般に使われていた普通名詞であり，その意味するところは曖昧である。それは徒弟制の下で修業した職人だけではなく，正式の訓練を受けていない手工業者も，また工場で労働する職工だけではなく，独立した手工業者をも含む用語である。しかし，社会全体の中に占めるアーティザンの比率が 23.5% であるのに対して，福音主義非国教徒の中それが 59.4% を占めるという事実は，福音主義非国教徒の社会層構成の最も重要な特徴であるといえる。また，すでに見たように福音主義者がプロテスタント非国教徒のうちの大部分を占めるのだから（つまり，クエイカーとユニテリアンの信者数は非常に少ないのだから），アーティザンの比率が高いことは，イングランドのプロテスタント非国教徒の特徴であるともいえる。したがって，非国教主義がブルジョワ的な宗教であるという通説が誤りであることは，明白である。

しかし，ギルバートに遅れること 20 年後に，マイケル・ワッツはギルバートが利用した資料を読み直して，19 世紀前半の非国教徒は，ギルバートが言うよりもさらに貧しく，労働者的であったと主張した。ワッツはギルバートの研究の前提に，二つの欠点があるという[46]。第 1 に，社会層構成はそれぞれの地域ごとに大きく異なるので，全国的な社会層構成を問題にすることは，あまり意味がない。むしろ，地域ごとに，全人口の社会層構成と非国教徒のそれとを比較するべきである。第 2 に，登録簿の中に記載された職業名から社会層のカテゴリーを設定するギルバートの仕方が粗雑である。これら二つの問題点についてギルバートは十分承知していたが，社会層構成の全体にとって大きな問題ではないと判断していたのである[47]。

しかしワッツは，同じ職業名が地域によって異なったカテゴリーを表す場合が多々あることを指摘する。例えば，clothier や hosier は一般には織物や靴下の商人を意味し，ギルバートのカテゴリーでは shopkeepers に所属するが，ノッティンガムシャー州やレスターシャー州ではむしろそうした製品の製造業主を意味したので，この地方においてはギルバートのカテゴリーの manufacturers に所属する。また，19 世紀前半において labourers という語は，農業労働者と港湾労働者についてのみ使用されたので，ギルバートの表の中では labourers の比率は低いが，artisans のうちの下層大衆は実際には labourers であった[48]。

このような問題があるので，ワッツはギルバートが artisans のカテゴリーに含めた多種多様な職業を，その平均収入レベルを基準にして，4 つのカテゴリーに分ける。こうしてワッツは全部で 11 の階層カテゴリーを設定する。第 1 階層は gentlemen and men of independent means[49]であるが，この階層に属する非国教徒は少ない。第 1 階層は「上流層」である。第 2 階層は businessmen。ここには，銀行家，貿易商，仲買商，製造業主などが含まれる。クエイカーやユニテリアンの中には，この階層に属するものが多い。第 3 階層は professional men。ここには弁護士，医者，建築士などが含まれるが，ここに属する非国教徒も少ない。第 4 階層は farmers（借

地農民）とyeomen（自営農民）。第5階層はretail traders, dealers, and food manufacturers。ここには，ビール造りやパン屋も含まれる。第6階層はwhite-collar workersである。第2階層から第6階層までが「中流層」である。

ワッツはartisanを第7階層から第10階層までの4つの階層に分ける。第7階層がlabour aristocracyである。一般に週30シリング以上の稼ぎがある職人であり，時計工，真鍮鋳造工，馬車製造工，印刷工，船大工などが含まれる。第8階層がhigh-skilled workersで，一般に週21シリングから30シリングを稼ぐ職人であり，鍛冶屋，ボイラー製造工，大工，鍵屋，旋盤工などが含まれる。第9階層はlow-skilled workersで，一般に週15シリングから20シリングを稼ぐ職人であり，炭鉱夫，靴屋，仕立工，巡査，染物師などが含まれる。第10階層はdepressed workersであって，一般に週15シリング以下の収入の職人である釘屋，チェイン製造工，掛枠工，織布工，そして家内使用人などが含まれる。第11階層はunskilled workersであって，これも週給15シリング以下の労働者である。この中には，召使い，漁師，庭師，船員，兵士などが含まれる。第7階層と第8階層は「上層労働者」であるが，第9，10，11階層は「下層労働者」である(50)。つまり，ワッツによればギルバートは，第9・10階層を「上層労働者」と同じくartisanのカテゴリーに含めていたのである。

ワッツは，各地の生誕・結婚・死亡民間登録所に現れて子供の生誕を登録した父親の職業名からその所属階層を推定し，所属教会・宗派ごとに纏めてみせた。その数値は52の州ないし地域の52枚の表に纏められている。ワッツは，19世紀前半の変化を見るために，10年ごとの統計を取っているので，その統計資料は膨大なものとなっている(51)。しかしワッツはそれらを全国の統計に纏めることはしなかった。彼はそれをあまり意味がない，と考えたのであろうが，それが無いので，我われはギルバートの［表6］と比較するべき表を持たない。そこで私は，ここでは，ワッツが作成した52枚の表のうちで比較的サンプル数の大きい地域を，地域的偏りの無いように6つ選んで，簡略化して示す。［表7］から［表12］までの，ダービーシャー州，デヴォン州，ランカシャー州，ノーファク州，スタッフォードシャー州，ヨークシャー州のウェスト・ライディングについての表である。

これらの表では，各州ないし地域の全人口の社会層構成と非国教徒諸派の社会層構成が記されているので，各宗派の社会層構成の特徴を知ることができる。まずクエイカー派は，どの地域でも，第2階層と第5階層に属する信者が相対的に多い。クエイカー派は典型的に中流層のブルジョワ的な宗派である。ユニテリアンは，イギリス産業革命の綿工業の中心地であったランカシャーでは第2階層に属する信者が相対的に多く，毛織物工業の中心地であったウェスト・ライディングでは第7・第8の上層労働者である信者が相対的に多かった。しかし，クイカー派とユニテリアンは19世紀初頭には，両者を合わせてもその信者数はせいぜい10万人の全くの弱小セクトであった。この両派については次節で扱いたい。

問題はその他の，合わせて260万人に上る福音主義非国教徒である。それらのうち，会衆派

（独立派）は，それぞれの地域の全人口の社会構成との比較の上で，相対的に第 2 階層や第 5 階層の「中流層」の比率がやや高く，第 11 階層の比率が大変低いので，ややブルジョワ的な宗派だといえる。これに対して，浸礼派（バプテスト派），ウェズレイアン・メソディスト派とプリミティヴ・メソディスト派は，それぞれの全人口の社会構成との比較の上で，相対的に第 9，10，11 の階層，つまり「下層労働者」の割合が大きい。この点が 19 世紀前半の非国教徒の社会層構成の最大の特徴であるといえる。しかも，ワッツの統計によれば，19 世紀中に福音主義非国教徒の信者数が増加するにしたがって，その中での「下層労働者」の割合は増加していく(52)。つまり，産業革命が進展していく状況の中で，巡回説教を展開した非国教徒伝道師たちの福音は，社会的に没落しつつある不熟練職人などの下層労働者や，常に死と隣り合わせの危険を背負って働く炭鉱夫などに受け入れられていったのである(53)。彼らこそが「神の恵み」を待ち望んでいたのであり，福音主義非国教徒の伝道師たちは，その心の渇きを「キリストの福音」によって癒したのである。

［表 7］　ダービーシャー州の幼児洗礼登録の父親の職業構成（％）

		州の全父親	会衆派	クエイカー派	ウェズリー派メソディスト	プリミティブメソディスト
		1841	1830–7	1790–1837	1830–7	1830–7
Ⅰ	Gentlemen	2.2	0.2	—	0.4	—
Ⅱ	Business	0.6	1.4	6.3	1.6	0.3
Ⅲ	Professions	0.9	—	1.6	0.3	—
Ⅳ	Farmers	9.4	4.5	15.9	2.8	2.5
Ⅴ	Food and retail	6.3	6.3	15.9	6.7	0.9
Ⅵ	White collar	2.2	3.7	0.8	2.6	1.2
Ⅶ	Labour aristocracy	3.7	8.5	15.9	4.9	3.0
Ⅷ	Higher skilled	14.5	24.1	16.7	17.4	10.9
Ⅸ	Lower skilled	17.8	27.7	10.3	28.9	35.4
	［Miners］	［7.8］	［12.9］	［—］	［14.5］	［26.5］
Ⅹ	Depressed	12.1	11.2	16.7	15.0	21.4
	［Framework knitters］	［5.6］	［6.6］	［15.1］	［9.8］	［13.7］
Ⅺ	Unskilled	30.5	12.3	—	19.4	24.4
	［Labourers］	［24.5］	［12.0］	［—］	［17.6］	［23.3］
	教会堂数		8		11	6
	父親の数	66,011	487	63	1,126	651

出典：Watts, 1995, p. 727 より作成。

［表8］ デヴォン州の幼児洗礼登録の父親の職業構成（%）

	州の全父親	会衆派	クエイカー派	ウェズリー派メソディスト	バイブルクリスチャン派
	1841	1830–7	1790–1837	1830–7	1830–7
Ⅰ	4.2	1.0	—	0.1	—
Ⅱ	0.7	1.5	16.3	1.2	0.2
Ⅲ	1.6	2.7	8.9	0.4	—
Ⅳ	9.4	3.9	10.5	4.7	18.4
Ⅴ	6.8	10.8	32.1	7.8	3.8
Ⅵ	2.3	4.9	7.1	2.0	0.6
Ⅶ	1.6	6.6	0.9	5.7	1.3
Ⅷ	17.3	24.2	8.5	22.8	15.3
Ⅸ	11.2	19.2	—	22.7	11.0
Ⅹ	1.2	0.4	—	0.6	0.3
Ⅺ	43.8	24.9	0.9	32.0	49.0
［労働者］	［30.8］	［15.2］	［0.9］	［18.0］	［47.3］
教会堂数		29		15	5
父親の数	119,621	1,020	112	2,616	463

出典：Watts, 1995, pp. 728–729 より作成。

［表9］ ランカシャー州の幼児洗礼登録の父親の職業構成（%）

	州の全父親	会衆派	浸礼派	クエイカー派	長老派とユニテリアン派	ウェズリー派メソディスト	メソディストニューコネクション	プリミティブメソディスト
	1841	1830–7	1830–7	1830–7	1820–9	1830–7	1830–7	1830–7
Ⅰ	2.1	0.1	—	—	0.7	0.1	0.4	—
Ⅱ	0.8	4.3	0.7	14.9	13.1	0.7	1.4	0.4
Ⅲ	0.9	1.1	0.1	1.9	2.0	0.2	—	—
Ⅳ	3.8	3.0	2.7	7.6	4.4	2.0	0.8	3.0
Ⅴ	6.8	8.9	5.7	29.8	9.8	4.5	2.7	1.9
Ⅵ	4.6	8.4	1.9	8.2	10.4	2.9	4.5	1.9
Ⅶ	7.2	8.4	9.6	4.2	7.4	9.2	10.0	7.8
Ⅷ	20.0	25.3	18.5	10.3	15.9	20.2	35.7	17.7
Ⅸ	18.0	15.2	10.3	15.1	7.7	16.7	22.5	10.8
Ⅹ	13.4	14.6	31.7	5.3	23.5	32.5	9.6	45.8
［枠編み工］	［11.2］	［14.1］	［31.4］	［5.3］	［22.9］	［32.1］	［9.0］	［45.7］
Ⅺ	22.4	10.6	18.7	2.7	4.9	11.2	9.3	10.7
［労働者］	［16.3］	［7.1］	［12.5］	［1.5］	［3.8］	［8.2］	［5.0］	［6.2］
教会堂数		43	6		10	66	7	7
父親の数	391,440	2,935	693	310	400	4,829	512	765

出典：Watts, 1995, pp. 741–742 より作成。

［表 10］　ノーファク州の幼児洗礼登録の父親の職業構成（％）

	州の全父親	会衆派	浸礼派	クエイカー派	ウェズリー派メソディスト	プリミディブメソディスト派
	1841	1830–7	1830–7	1810–37	1830–7	1830–7
Ⅰ	2.7	1.0	—	1.2	0.4	—
Ⅱ	0.5	4.6	1.2	18.1	0.2	0.2
Ⅲ	1.0	1.9	—	1.2	—	—
Ⅳ	7.3	9.2	4.9	10.6	4.5	3.5
Ⅴ	8.2	15.3	10.2	34.7	11.9	4.0
Ⅵ	2.7	8.3	4.1	6.0	3.9	1.8
Ⅶ	1.8	2.9	3.3	6.2	2.0	1.4
Ⅷ	13.3	11.5	18.0	8.1	15.5	15.2
Ⅸ	10.0	11.8	11.1	9.1	15.0	12.4
Ⅹ	3.1	9.0	7.8	3.1	4.5	8.0
Ⅺ	49.3	24.5	39.3	1.2	42.1	53.3
［労働者］	［40.9］	［21.1］	［31.6］	［1.2］	［38.0］	［47.4］
教会堂数		8	4		17	8
父親の数	95,377	206	122	80	852	523

出典：Watts, 1995, pp. 748–749.

［表 11］　スタッフォドシャー州の幼児洗礼登録の父親の職業構成（％）

	州の全父親	会衆派	浸礼派	ウェズリー派メソディスト	メソディストニューコネクション	プリミティブメソディスト
	1841	1830–7	1830–7	1830–7	1830–7	1830–7
Ⅰ	1.8	—	—	0.1	—	—
Ⅱ	0.6	4.5	2.3	1.0	0.4	—
Ⅲ	0.8	0.2	—	0.3	0.2	—
Ⅳ	4.7	2.8	—	2.6	0.5	1.3
Ⅴ	6.1	8.9	—	4.8	2.5	3.6
Ⅵ	2.5	5.9	3.9	2.5	2.0	1.2
Ⅶ	9.2	6.4	20.2	10.8	13.0	7.3
Ⅷ	23.8	27.4	16.3	33.3	57.7	42.1
［陶磁工］	［5.7］	［10.1］	［0.8］	［16.1］	［42.8］	［24.1］
Ⅸ	20.3	20.9	45.0	27.9	14.0	19.0
［鉱夫］	［11.3］	［9.1］	［34.1］	［16.7］	［5.9］	［10.3］
Ⅹ	3.0	5.1	—	2.7	1.3	1.6
Ⅺ	27.3	17.9	12.4	14.1	8.3	23.8
［労働者］	［23.5］	［13.9］	［12.4］	［12.9］	［7.2］	［23.2］
教会堂数		12	4	16	3	7
父親の数	124,077	287	129	1,908	1,150	583

出典：Watts, 1995, pp. 760–761.

［表12］ ヨークシャー州ウェスト・ライディング地方の幼児洗礼登録の父親の職業構成（%）

	地方の全父親	会衆派	浸礼派	クエイカー派	ユニテリアン派	ウェズリー派メソディスト	メソディスト ニューコネクション	プリミティブメソディスト
	1841	1830–9	1830–7	1830–7	1830–7	1830–8	1830–7	1830–7
Ⅰ	2.0	0.3	0.1	—	0.9	0.1	—	—
Ⅱ	1.0	5.3	2.3	10.2	1.9	1.4	1.5	0.5
Ⅲ	0.8	0.6	—	3.1	0.9	0.2	0.2	0.1
Ⅳ	5.7	4.9	2.6	5.7	1.9	4.8	0.9	1.2
Ⅴ	6.3	7.0	3.0	36.2	2.8	4.4	3.6	2.2
Ⅴa	3.2	13.4	5.0	8.6	—	15.0	20.2	1.3
Ⅵ	2.8	4.0	1.9	4.2	6.5	3.1	2.9	1.6
Ⅶ	4.1	3.8	1.0	4.0	29.4	2.1	2.3	0.4
Ⅷ	17.8	23.3	13.7	9.8	31.3	15.3	22.3	13.2
Ⅸ		17.6	20.0	10.0	14.0	21.3	27.3	35.2
Ⅹ	36.7	11.8	46.7	4.2	1.9	22.6	13.2	33.7
［織布工］	［—］	［11.4］	［45.9］	［4.2］	［0.9］	［22.1］	［12.8］	［33.6］
Ⅺ	19.8	8.0	3.8	4.0	8.4	9.7	5.7	10.5
［労働者］	［15.0］	［5.5］	［3.1］	［2.9］	［7.5］	［6.6］	［4.4］	［9.2］
教会堂数		55	9		4	78	11	14
父親の数	268,405	2,066	733	261	107	3,436	516	768

出典：Watts, 1995, pp. 774–776.

4．富と信仰

非国教主義がブルジョワ的な宗教であったという通説は，産業革命期に活躍した実業家の中に非国教徒が多いという通説と繋がっている。実際，T・S・アシュトンやP・マサイアスは，そのイギリス経済史の教科書の中で，18・19世紀イングランドにおいて成功した実業家の中に非国教徒が目立って多い，という説を書き記してきた(54)。これは最近まで，数量的根拠なしに通説としてまかりとおってきた。しかし実業家や富豪を大量観察した1980年代の諸研究は，この通説をくつがえした。

まず，アンソニー・ハウの研究によれば，19世紀中頃の（経歴がわかる）ランカシァー州の綿業企業家の教会所属分布の状態は［表13］のようになっている。この表で明らかなように，綿業企業家全体の約半数はアングリカン（国教徒）である。したがって「成功した実業家のなかに非国教徒が目立って多い」という通説は間違っているわけである。第2に，［表13］の分布状況を，［表2］で示される1851年宗教国勢調査に現れた「全人口のなかでの各宗派の主日礼拝出席者の割合」と比較する。そうすると，とりわけクエイカー派とユニテリアン派（すなわちオールド・ディセント）だけが，その実際の信徒数に比べて異常に多くの成功した実業家を生み出し，会衆派は比較的多くの実業家を生み出したが，その他の非国教徒は信徒数に比べて非常に低い割合で成功した実業家を輩出したことが明らかとなる(55)。

しかし，ランカシャー州の綿業企業家の教会所属分布を，全人口の中での各宗派の信徒数の割

［表 13］ 19 世紀中葉のランカシャー綿企業家の宗教的分布

	企業者数	%
英国国教会（アングリカン）	145	49.7
メソディスト諸派（ウェズリー派とバイブル・クリスティアン）	31	10.6
福音主義非国教徒諸派（長老派，独立派，浸礼派）	36	12.3
（うち，独立派）	(27	9.2)
ユニテリアン	53	18.2
クエイカー	15	5.1
その他の非国教徒諸派	6	2.1
その他[1]	6	2.1
計	292	100.1

注：1）スウェーデンボルグ派，モラヴィア派，ルター派，ローマ・カトリック，およびユダヤ教徒。
出典：Howe, 1984, p. 62.

［表 14］ ランカシャー主日礼拝出席者の州全人口に対する割合

	%
英国国教徒	14.4
メソディスト諸派	6.15
福音主義非国教徒諸派	4.5
（うち，独立派）	2.8
ユニテリアン	0.4
クエイカー	0.1
その他の非国教徒諸派	0.9
カトリック	5.8
その他	0.2
全ての礼拝出席者	32.4
文盲率	49.3

出典：Watts, 1995, pp. 706–707 より作成。

［表 15］ ランカシャー主日礼拝出席者全体の中での宗派別割合

	%
英国国教徒	44.4
メソディスト諸派	19
福音主義非国教徒諸派	13.9
（うち，独立派）	8.6
ユニテリアン	1.2
クエイカー	0.3
その他の非国教徒諸派	2.8
カトリック	17.9
その他	0.6
全ての礼拝出席者	100
文盲率	

合と比較するのは，やや不適切である。前者は，正しくはランカシャー州の全人口（2,067,301 人）の中での各宗派の割合と比較されるべきである。［表 14］は，1851 年宗教国勢調査に現れたランカシャー州の全人口の主日礼拝出席者の割合を示した表である[(56)]。この表を見てまず目に付くのは，ランカシャー州の住人の教会出席率の低さである。それは僅かに 32.4% である。それは，ランカシャー州住民のうちの 49.3% に達する文盲率の高さと関係しているのであろう。もう一つの特徴は，カトリック教会への主日礼拝出席者の比率の高さである。それは州全体の 5.8% になるが，ランカシャー州はイングランドの中でカトリック信者の最も多い州なのであった。

だが，それらの点にここで踏み込むのはやめよう。ハウの綿業企業家に関する［表 13］と比較するべきなのは，ランカシャー州の主日礼拝出席者の全体に対する各宗派の信者の割合である。［表 14］の中の各宗派の出席比率を，出席者全員の比率である 32.4% で除すると，［表 15］が得られる。［表 15］の数値を［表 13］の数値と比較すると，次のような点が指摘できる。綿業

［表16］ 18・19世紀イギリスの億万長者と半億万長者（ただし地主を除く）の宗教的分布

	億万長者数	%	半億万長者数	%
英国国教会	92	51	260	56
非国教徒諸派	26	15	70	15
スコットランド教会	28	16	74	16
カトリック	0	0	7	2
ユダヤ教	28	16	38	8
ルター派	3	2	0	0
ギリシア正教	2	1	11	2
その他	0	0	5	1
不　明	19	—	114	—

出典：Rubinstein, 1981, pp. 150–51.

［表17］ 表16中の非国教徒諸派の内訳

	億万長者数	%	半億万長者数	%
独立派	6	4	17	4
浸礼派（バプテスト）	2	1	6	1
クエイカー	9	5	20	4
ユニテリアン	4	2	8	2
メソディスト	2	1	1	0.2
その他	2	1	18	4

出典：Rubinstein, 1981, pp. 152–53.

企業家全体に占めるアングリカン（英国国教徒）の割合は，主日礼拝出席者全体の中に占めるアングリカンの比率より高い。綿業企業家全体に占めるメソディストの割合は主日礼拝出席者の中に占める割合の半分しかおらず，カトリック教徒は極端に低い。福音主義オールド・ディセント（会衆派，浸礼派，長老派[57]）の二つの比率はほとんど同じである。そして，綿業企業家全体の中に占めるクエイカーとユニテリアンの割合は，主日礼拝出席者全体の中に占める両派の割合と比べると，異常なほどに高い。したがって，ハウの二つの結論は，ランカシャー州だけについて調べた宗派別構成によっても，支持されるのである。

次に，19世紀イギリスの富豪についてのW・D・ルービンステインの研究成果を紹介しよう。［表16］は，1809年から1939年までの遺産総額100万ポンド以上のイギリス人（つまり億万長者。ただし地主を除く）と，遺産総額50万ポンド以上のイギリス人（つまり半億万長者。同じく地主を除く）の所属教会分布の状態を示したものであり，［表17］はそのうちの非国教徒の内訳を示したものである。大富豪のうちから地主を除いたものは，すなわち，実業によって巨万の富を蓄えた人を意味するであろう。この二つの表からは，大成功した実業家（銀行家や貿易商人と工業資本家を含む）の半数あまりがアングリカンであること，また，全人口に対する信徒数の割合に比べて異常に多くの大成功した実業家を生み出しているのがクエイカー派とユニテリアンとユダヤ教徒であり，会衆派（独立派）にも比較的多めの実業家が含まれた，ということが

明らかとなる[58]。

以上のように，ハウとルービンステインの研究は次の2点を実証した。第1に，非国教徒一般が実業家として成功して富を得たわけではないこと。第2に，実際の信徒数に比べて比較的多くの成功した実業家や富豪を生み出したのが，クエイカー派とユニテリアン派と会衆派であったことである。これらの事実の原因は，究明されなければならない。

ただし，ここで気をつけなければならないのは，「実業家としての成功」と「富豪になることと」は，やや性質の異なる問題だ，ということである。この点について有益な示唆を与えるのは，リーズ（ヨークシャー州）の問屋制織元，ジョウゼフ・ライダー（1695～1768年）の事例である。彼は会衆派のコール・レイン教会堂のメンバーであり，1733年以後，死に至るまで信仰日記を書き続けた。彼は自分で購入した羊毛を，周辺の家内手工業者たちに前貸しして糸に紡がせ，その糸を使って，マニュファクチャーの作業場で，労役場から身受けした孤児たちを監督して働かせることによって毛織物に織り上げて販売する，という事業を行なっていた。日記から窺える彼の心性の特徴は，霊的召命と世俗的召命における勤勉，時間の有効利用，そして物質的禁欲であった。彼はまさに，禁欲的職業倫理の実践者であった。当然のことながら，彼は，利潤追求の経済活動と信仰生活という，本来矛盾する二つの事柄を両立させることの難しさに生涯苦しみ続けた。そして，利潤追求と宗教的義務とが衝突する具体的局面においては，彼は常に宗教的義務を優先させた。そして，寡婦や孤児などの，働く力のない貧民への慈善活動を定期的に実施した。したがって，彼は富豪にはならなかった。彼の遺産総額は約250ポンドという，中流のつつましいものであった[59]。

したがって，以下では「実業における成功」と「富豪になること」を一応別の現象として，考察する。まず，オールド・ディセント，特にクエイカー派とユニテリアン派が，実際の信徒数に比べて異常に多くの成功した実業家を生み出した事実について考えよう。これについて，私はかつて，4つの理由を挙げて説明した。第1に，クエイカー派とユニテリアン（つまり，その母胎であったイングランド長老派）がいずれも元来，17世紀イングランドにおいて中流社会層，とりわけ都市の商工業者たちによって担われて成立したこと。第2に，王政復古期に彼らに対して国家権力によって加えられた迫害。また，1689年の「信教自由法」の成立以後の差別状況。第3に，禁欲的な職業倫理の実践。第4に，両派が下層階級への伝道を行なわなかったこと，である[60]。これらの点について新しい研究成果を踏まえて，再検討していこう。

第1の社会層の問題に関する最近の研究は，17世紀末のクエイカー派とイングランド長老派の社会層構成においては，全人口の社会層構成に比べて，都市の住民の割合が比較的多かったことを確認している。しかし，都市の中での非国教徒の社会層構成は，都市民全体の社会層構成とはほぼ同じであった[61]。王政復古期におけるクエイカー派の都市への人口集中の動きがみられるが，それは，迫害に対処するためであった。彼らは敢えて迫害に身をさらすこと選んだが，商工業に従事する方が，農業に従事するよりも，迫害を受けた時のダメージが少なかったからであ

る[62]。したがって，迫害が18世紀のクエイカー派を都市の商工業者の宗派にした，と言えよう。その他のオールド・ディセントも迫害や差別の影響をある程度受けたであろう。だが，「便宜的国教遵守」という手段をとって迫害を回避することを選んだ長老派にとっては，迫害の影響は軽微であったと思われる[63]。

第2に，禁欲的職業倫理は，近世イングランドのほとんど全ての非国教徒と国教徒の聖職者や指導者によって説かれて，信者たちによって実践されたのであり[64]，クエイカーやユニテリアンに特有なものではなかった。禁欲的職業倫理について注意したいのは，マックス・ヴェーバーが問題にしたのは禁欲的職業倫理一般ではない，ということである。彼は，プロテスタントの特殊な教義が，禁欲的職業倫理を強力に実践するための「内面的機動力」を信者たちに与えた，と論じた。すなわち，17世紀のカルヴァン派[65]はその「二重予定説」によって，また，再洗礼派諸派とその傍系諸派はその「回心した真の信仰者のみによって構成される教会」という教会論によって，信者たちが「救いの確証」を得るために世俗内の職業労働に専心するように誘導した，というのである[66]。17世紀イングランドの会衆派（独立派）と特殊恩寵浸礼派は，ヴェーバーが問題にした「二重予定説」と「信じる者の教会」論を共に採用した。彼らがピューリタン革命の先鋒に立ったのはそれらの教義に支えらたからである[67]。しかし，18・19世紀において両派はブルジョワ的な宗派としての特徴をあまり示さなかった。その理由としては，一応次のような事態が想定される。つまり，旧来の信者家族はそれらの教義に支えられてブルジョワ化したかもしれないが，両派は18世紀後半以後，福音主義運動によって覚醒して下層大衆への福音伝道を積極的に展開したために，多くの下層大衆を抱え込むことになった。そこで，全体としてはブルジョワ的な性格をかき消された，というわけである。もっとも，このような事態を，史料的に証明することは大変難しい。

しかし，信徒数の少なさにもかかわらず，数多くの成功した実業家を生みだしたクエイカー派とユニテリアン派の両派は，共に，二重予定説を嫌悪して普遍救済説を採用した。また，彼らは「信じる者の教会」という理想も持っていなかった。したがって，禁欲的職業倫理に関するヴェーバーのテーゼは，プロテスタント非国教徒の実業家としての成功を説明するには不適当だということになる。

クエイカー派とユニテリアン派が，実際の信徒数に比べて異常に多くの成功した実業家を生み出した理由として私たちが重視するべきなのは，その同じ時期に，両派が信者数を極端に減らしていった事実である。実際，この二つの動きは，表裏一体の関係にあった。

ユニテリアン派の母胎であるイングランド長老派の信者数は1710年代には18万人を数えたが，プリーストリーに指導されてユニテリアンと名称を変更したのち，19世紀末にはほとんど消滅しそうになった[68]。その後，プリーストリー派の合理主義を批判するJ・マーティノーの指導の下で勢力を盛り返したが[69]，1851年の主日礼拝出席者は3万4千人にすぎなかった。18世紀末のユニテリアンが都市の商工業者の宗派という性格を色濃くするようになったのは，（ユン

テリアンの母胎である）長老派の信者のうちで，都市の裕福な商工業者たちが，合理主義的で異端的なユニテリアンの宗教思想を好んで選びとったからなのである。逆に，福音主義的でカルヴァン主義正統派の信仰を好んだ中流下層以下の信者は，異端的な思想傾向を持つ聖職者たちを嫌って別個の会衆を組織し，やがて，会衆派（独立派）や特殊恩寵浸礼派，あるいはスコットランド系長老派教会に合流していった[70]。

他方，クエイカー派は18世紀の100年間に，信者数を約6万人から1万5千人と4分の1に減少させた。その原因については，私はすでに別の機会に論じたことがある[71]。一言でいえば，内向的で排他的で律法主義的な「静寂主義者」の指導者たちによって18世紀クエイカー派が支配されたことが，教団の衰退の原因であった。王政復古期の大迫害が終わった17世紀の末には，イングランドのクエイカーの9割はクエイカーの家庭に生まれ育った人たちであった。しかし，「信教の自由」が認められて迫害が終わった状況においても，クエイカー派の指導者たちは福音伝道を行なう意志を全く持たなかった。彼らは逆に，自分たちの共同体を柵で囲んで世間から隔離しようとした。クエイカー派の最高会議であるロンドン年会は1737年に生得教会員資格を制度化し，1752年にはクエイカーの非クエイカーとの結婚を除籍処分でもって禁じた。そのためにクエイカーの家族は互いに姻戚関係で結びつき，クエイカー派全体が巨大な氏族集団になった[72]。

また，事業に失敗して破産したクエイカーは，例外なく教団から除籍された。例えばブリストルの月例管理委員会は19世紀前半に延べ293名の信者を除籍したが，その内で非クエイカーとの結婚を理由として除籍されたものは97名であり，事業で破産したために除籍された者は78名であった。このようにクエイカー派は，零落した信者を切り捨てることによって信者数を減らしながら，ますますブルジョワ的な教団になっていった。しかも，クエイカー派は有給の聖職を認めなかった（「万人祭司」説の具体化）ので，無給で活動できる裕福な実業家家族が教団の管理運営を担当した。そのために，全国に設置された教団管理運営のための集会が，そのまま，経済情報の交換・収集の場になった[73]。

以上のように，クエイカー派とユニテリアン派がブルジョワ的な宗派になって，実際の信徒数に比べて異常に多い実業家を生みだした最も重要な原因は，両派が下層大衆への福音伝道に背を向けたこと，つまり，キリストの本来の教えである隣人愛の黄金律から逸脱してしまったことにあったのである。

我われは最後に，億万長者や半億万長者のリストの中にユダヤ教徒，クエイカー派，ユニテリアン派の信者が，その信者実数に比較して異常に多く含まれている理由について考えよう。まず，ユダヤ教徒がロンドンの金融業者のなかに多いことの理由は，良く知られている。彼らはキリスト教社会において差別され，疎外されたからこそ，賤民の仕事とされた金融業に中世以来従事してきた。彼らは，何代にもわたって，その業務上の「ノウハウ」を蓄積して伝承し，またヨーロッパ中に張り巡らされた金融情報ネットワークを通して事業を繁栄させたのであった[74]。

問題は，クエイカー派とユニテリアン派における富豪の多さである。前述のように，わたしは「実業において成功する」ことと「大富豪になる」こととの間には質的な相違がある，と考える。ここでは後者の例としてベンジャミン・フランクリンを取り上げたい。彼は北アメリカ植民地ボストンの貧しいロウソク製造業者の家に生まれたが，フィラデルフィアで勤労，節約，規律，正直，時間厳守などの徳目から成る禁欲的職業倫理を実践し，世間の信用を得て，印刷業者として自立した。しかし彼は一介の印刷業者として生涯を全うしたのではなかった。彼は商品市場についての情報を抜け目なく収集し，商売敵を卑劣な手段を使って容赦なく打ちのめし，出版業，文具販売など多角化戦略を展開して儲けの多い事業の規模を拡大し，事業にとって役立つ有能な人物や政府関係者との親密な関係を築き，倉庫業や土地投機にも触手を伸ばした(75)。彼は1748年に42歳になって実業界から身を引いたが，この時の彼の年収は約2,000ポンドに達したと思われる。これは当時のイングランドの小貴族に匹敵する収入であった。このような大富豪になったから，フランクリンは科学研究と政治活動に専心して，その分野の業績で歴史に名を残すことができたのである。

フランクリンを一介の印刷業者として自立させたのは禁欲的職業倫理であるが，彼を大富豪にさせたのは「企業家精神 entrepreneurship」である。産業革命期に実業において大成功して富豪になった人々は，先にみたライダーのタイプではなく，フランクリンのタイプの人々であった。イングランドにおけるその一例として我われは，イングランド北東部で「ピーズ王朝」と呼ばれる地方財閥を築いたジョウゼフ・ピーズを取り上げよう(76)。

ピーズ家の中で最初にクエイカーになったのはエドワード（1711～1785年）で，彼はそのために親から勘当されてダーリントンに移り住み，やがて毛織物製造企業を創業して成功していった。その息子ジョゼフは小さな銀行を毛織物業の外業部として設立したが，しかしこの段階では，ピーズ家は目立たない小規模な企業家家族にすぎなかった。ピーズ家の発展の基礎は，ストックトン＝ダーリントン間鉄道の開設によって築かれた。ジョウゼフの息子エドワード（1767～1858年）が，この地域の経済発展に決定的な役割を果たした鉄道建設事業を推進し，これに出資して大きな利権を持ったからである(77)。しかしエドワードは，「簡素」の教えを貫き，1827年には実業から身を引いて，以後，宗教活動に専心した。

エドワードの息子ジョウゼフ（1799～1872年）は，父とは違って，利潤追求にいささかの良心の呵責を感じない企業家であった。ダラム州の西部と南部は19世紀第2四半期における新しい炭田の発見によって，また，第3四半期にはクリーヴランドの鉄鉱床の発見によって大発展を遂げた。ジョウゼフ・ピーズはストックトン＝ダーリントン間鉄道の利権を足掛かりにして，ミドルズブラに新たな港湾施設を建設し，鉄道網を拡充し，炭田と鉄鉱山に投資するなど，事業を積極的に多角化していった。その事業展開は，投機的な性質を持つものが多く，また同業者との厳しい競争の中で行なわれたが，ジョウゼフはその企業家能力を発揮して，幾つもの難局を乗り切っていった。彼はミドルズブラの開発にも関わり(78)，その不動産から巨額の地代収入を得

た。それに従来からの毛織物と銀行の事業を加えて，ジョウゼフは「ピーズ王朝」を成立させた。彼の遺産総額 32 万ポンドは，ルービンステインのいう「半億万長者」のランクには達しないが，カービーによれば，ヴィクトリア期実業家の遺産総額の平均の約 3 倍であった[79]。彼が富豪になった理由は，以上のように，彼の並外れた「企業家精神 entrepreneurship」にあった。

父エドワードは，ジョウゼフの投機的な事業展開を憂慮して，しばしば息子を叱責したが，ジョウゼフは忠告を聞く耳を持たなかった[80]。しかし，ジョウゼフはクエイカーとしての信仰を失ったわけではなかった。実際，彼は晩年には牧会者 minister としての資格を得た[81]。飽くなき利潤追求と信仰とは，いかにして結びつくのだろうか。その答えのヒントは，彼が自由党の国会議員として政界でも活躍した，という事実にある[82]。実際，ジョン・ブライト，ヘンリ・アシュワース，ジョウゼフ・クロスフィールドなど，多くのクエイカー富豪実業家が実業と政界活動とクエイカーの信仰を鼎立させた[83]。彼らの信仰は，無償の愛の実践を説くものとは逆に，自由競争原理に「神の摂理」を見る信仰だったので，それが可能だったのである。

自由競争原理に「神の摂理」を見るタイプの信仰を始めて大胆に押し出したのは，おそらく 18 世紀末のユニテリアン派の宗教的指導者 J・プリーストリーであろう。彼は，ベンサムに先立って「最大多数の最大幸福」を追求することの政策的重要性を説き，自由競争原理の貫徹によって国民経済が発展することに「神の摂理」を見た。しかし彼は，人類の原罪，キリストの神性，キリストによる贖罪，といったキリスト教の本質的な教えを否定した。自らは豊かな生活と（哲学や化学などの）研究生活の楽しみを享受したが，貧民たちの苦しみや「隣人愛」の教えを理解するつもりはなかったようである[84]。19 世紀の富豪のキリスト教信仰とは，そのような合理的で自由主義的で，利潤追求の欲望を「解放」するタイプの信仰だったのである。

注

（1）Weber, 1920, 大塚久雄訳, 342 頁。
（2）Weber, 1920, 大塚久雄訳, 345 頁。
（3）Weber, 1920, 大塚久雄訳, 351 頁。
（4）Weber, 1920, 大塚久雄訳, 352～353 頁。
（5）岸田, 1977, 第 2 章。
（6）Weber, 1920, 大塚久雄訳, 356 頁。
（7）Brown, 2008, pp. 10～11.
（8）詳しくは，山本, 2014b を見よ。
（9）Brown, 2008, p. 13.　1815 年には，イングランドとウェールズの全ての行政官 magistrate のうちの 4 分の 1 は聖職者であり，全ての聖職者の 6 分の 1 は行政官でもあった。
（10）浜林, 1987, 187 頁, 7–1 表を参照せよ。
（11）Brown, 2008, p. 15. 浜林, 1987, 186～187 頁をも参照せよ。
（12）Yates, 2008, pp. 165～168.
（13）Gilbert, 1976, pp. 94～110; Brown, 2008, p. 14.
（14）1689 年の「信教寛容法」によって，カトリック教徒以外の三位一体論を奉じるクリスチャンには信教

の自由が認められて，プロテスタント非国教徒に対する迫害は終わった。しかし，政府は「審査法」,「都市自治体法」その他，を残すことによって，彼らへの差別を続けた。例えば，非国教徒の聖職者は都市自治体の中で聖職を実行することを禁止され，非国教徒信者は，官職や軍隊から排除されていた。

(15) Brown, 2008, pp. 79～89, 92. 請願書には7千人の聖職者と23万人の戸主の署名が付された。

(16) Brown, 2008, pp. 92～97. Sykes, 1961, 野谷啓二訳, 2000, 160頁をも参照。なお，これと並行して，十分の一税の金納化，結婚式の国定教会以外での挙行の自由化，生誕・結婚・死亡の登録の国定教会から役所への移管を定める法律が，次々に成立した。

(17) 山本, 2010, 176頁。

(18) 山本, 2014, 39～41, 43～44頁。

(19) Watts, 1978, pp. 397～402.

(20) Watts, 1978, pp. 402～406; Yates, 2008, 77～83.

(21) Watts, 1978, pp. 428～434, 445～449; Yates, 2008, 88～95.

(22) Currie, 1968, chapter 1.

(23) Gilbert, 1976, pp. 30～32.

(24) 浜林, 1966, 第1章；大西, 2000, 第8章。

(25) Watts, 1978, p. 270.

(26) ただし，ユニテリアン派はかつてのイングランド長老派だけから生まれたのではない。そこにはT・リンゼイに指導されたイングランド教会の一派と，普遍救済浸礼派の大半，そして会衆派の一部が合流した。

(27) この時期のイングランドのクエイカー派の歴史については，山本, 1994, 第1章～第4章を見よ。

(28)「教会分裂阻止法」は，非国教徒の礼拝集会に出席した者が教職に就くことを禁止するもので,「非国教徒アカデミー」を抑圧するためにトーリー党員が国会に上程したものであった。同法は「便宜的国教徒禁止法」とともに，1719年に廃止された。

(29) Watts, 1978, p. 270. 3教団委員会はクエイカー派についての調査を行なわなかった。しかしクエイカー派は，王政復古期以後，会衆ごとの出生，結婚，埋葬の記録を几帳面に記録してきたので，ワッツはそれらの記録を利用できたのである。

(30) 1851年の宗教国勢調査には，解釈上幾つかの難しい問題がある。一番大きな問題は，多くの教会では日曜日に午前と午後と夕方の3回に亘って礼拝集会が持たれ，複数の礼拝に与る信者も多かった，という点である。マンは午前の礼拝に出席した人の数に，午後と夕方の出席者のそれぞれ半分を加算している。Inglis, 1960は午前，午後，夕方の出席者の全てをそのまま加算している。ワッツは，メソディストの場合はイングランド教会の小教区教会の礼拝に午前か午後に与り，メソディストの教会堂には夕方出かけることが多かった点を重視した。そこでワッツは，各教会（堂）の午前，午後，夕方の最大の数値をそのまま数え，それにその他の出席者数の3分の1を加えた。

(31) Watts, 1995, p. 28.

(32) Inglis, 1960, p. 86.

(33) なお，1851年3月30日にウェールズにおける教会（堂）礼拝出席者数の全人口比は57.34%とイングランドよりはるかに高かった。そのうちで非国教徒は45.5%で，イングランド国教徒は11.14%であった。ウェールズの非国教徒の中では，カルヴァン主義メソディストが対全人口比15.88%で最も多く，次いで会衆派（独立派）が対全人口比13.11%，浸礼派が対全人口比9.13%であり，アルニミウス主義メソディストは対全人口比で6.57%に過ぎなかった。Watts, 1995, p. 28.

(34) Watts, 1995, p. 29.

(35) Watts, 1995, p. 23.

(36) Watts, 1995, pp. 177～178.

(37) Sellers, 1976, pp. 8～17, 20～30.

(38) Currie, 1967.

(39) Watts, 1995, pp. 682～717 Table XIV.
(40) Watts, 1995, p. 48.
(41) Watts, 1978, pp. 421～428
(42) Watts, 1995, pp. 44～45.
(43) ただし，メソディズム研究者の中には，メソディズムと労働運動の関係を検討したロバート・ウィアマスやフランス人であるイギリス史研究者エリー・アレヴィーのような重要な例外がある。彼らが提起した問題については別のところで論じたいが，さしあたっては，山本, 1996b を見よ。
(44) Gilbert, 1976, pp. 63, 67. なお，山本, 1996a, p. 175 に訳出した［表 5–9］には，致命的な誤りがある。表中の宗派名が間違っているので，これは利用されないでいただきたい。すでに別のところでも記したが，改めて読者の皆さんにお詫びします。
(45) Gilbert, 1976, p. 66.
(46) Watts, 1995, pp. 303～310.
(47) Gilbert, 1976, pp. 63～66.
(48) Watts, 1995, pp. 311～312, 321.
(49) men of independent means というのは「国王や廷臣，聖職者や地主によって庇護されることなく，高い地位と豊かな生活を享受している人」(Watts, 1995, p. 313) の意味である。つまり，貴族や地主の子弟であり，親の遺産で生活する有閑階級の人である。初期クエイカー派ではウィリアム・ペンやロバート・バークリーがそれにあたる。バークリーについては山本, 1994 を参照。
(50) Watts, 1995, pp. 311～313.
(51) Watts, 1995, pp. 718～788.
(52) Watts, 1995, p. 325.
(53) Watts, 1995, p. 323.
(54) Ashton, 1947, pp. 17～19, 中川訳, 27～28 頁；Mathias, 1969, 小松監訳, 162～177 頁。
(55) Howe, 1984, pp. 61～72.
(56) Watts, 1995, pp. 706～707.
(57) 1851 年の宗教国勢調査に現れる「長老派」はユニテリアンに変身してしまったイングランド長老派を意味するのではなく，イングランドに流入してきたスコットランド長老派教会に所属する信者である。
(58) Rubinstein, 1981, pp. 150～153.
(59) Jacob and Kadane, 2003; 山本, 2004c, 8～11 頁。
(60) 山本, 1996a, 169～170 頁。
(61) 山本, 1994, 10～15 頁; Watts, 1978, pp. 346～354.
(62) 山本, 1994, 20～21 頁。
(63) Watts, 1978, pp. 227～230
(64) 山本, 2014b を参照せよ。禁欲的職業倫理が 19 世紀のイングランド教会と非国教徒諸派の福音主義者たちによって熱烈に説かれたことについては，Garnett, 1986; 山本, 2000, 151, 154 頁を参照。
(65) つまり，ヴェーバーが問題にするのは，カルヴァンが説いた教義ではなく，第 2，第 3 世代のカルヴァン主義の指導者たちが説いた教義である。
(66) Weber, 1920, 大塚久雄訳, 138～288 頁。特に，纏めの部分である 286～288 頁。
(67) Walzer, 1965; 浜林, 1966.
(68) この時，フランス大革命を公に支持したユニテリアン派の指導者プリーストリーは，暴徒の焼打ちに会ってロンドンに逃れ，さらにアメリカに亡命した。Short, 1968, pp. 233～235.
(69) Short, 1968, pp. 252～264.
(70) Goring, 1968, pp. 197～211; Watts, 1967, pp. 464～471.
(71) 山本, 1983, 1～16 頁。
(72) 山本, 1994, 88～91 頁。

（73）山本, 1994, 203～210頁。

（74）ユダヤ人と資本主義の関係については数多くの研究書があるが，入手し易い物として，Sombart, 1911 金森・安藤訳と Leon, 1968 波田節夫訳を挙げておきたい。

（75）山本, 2014a, 137～140頁。

（76）ピーズ王朝の発展と崩壊については，Kirby, 1984 を参照せよ。

（77）ストックトン＝ダーリントン間鉄道，およびそれへのクエイカーの関わりについては，湯沢, 2014, 第5章を参照せよ。

（78）工業都市ミドルズブラの発展については，安元, 2009 を参照せよ。

（79）Kirby, 1984, p. 45.

（80）Kirby, 1984, p. 50.

（81）Kirby, 1984, p. 49.

（82）Kirby, 1984, pp. 55～57.

（83）山本, 1994, 第5章。

（84）Short, 1968, pp. 226～234; Watts, 1967, pp. 471～479, 486～490; Tapper, 1996, pp. 272～286. プリーストリーについて簡単には，杉山, 1974 を見よ。これは，私とは違って，プリーストリーを悲劇の主人公として描いている。

参考文献

W. Sombart, 1911, *Die Juden und das Wirtschaftsleben*, Munchen und Lipzig,『ユダヤ人と経済生活』金森誠也・安藤勉訳，荒地出版社，1994年

M. Weber, 1920, Die protestantische Ethik und der »Geist« des Kapitalismus, *Gesammelte Aufsaetze zur Religionssoziologie*,『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳，岩波書店（文庫）1989年

R. V. Holt, 1938, *Unitarian Contribution to Social Progress*, London.

T. S. Ashton, 1947, *The Industrial Revolution*,『産業革命』中川敬一郎訳，岩波書店（文庫）1973年

K. S. Inglis, 1960, 'Patterns of Religious Worship in 1851', in *Journal of Ecclesiastical History*, No. 11.

N. Sykes, 1961, *The English Religious Tradition: sketches of its influence on church, state and society*, SMC press.『イングランド文化と宗教伝統』野谷啓二訳，開文社出版，2000年

E. P. Thompson, 1963, *The Making of the English Working Class*, London,

M. Walzer, 1965, *The Revolution of the Saints: a study of the origin of radical politics*, Cambridge, Mass.

浜林正夫，1966,『イギリス革命の思想構造』未来社

W. Pickering, 1967, 'The 1851 Religious Census-a Useless Experiment?' in *British Journal of Sociology*, No. 18

R. Currie, 1967, 'A Micro Theory of Methodist Growth' *Proceedings of the Wesley Historical Society*, No.36

R. Currie, 1968, *Methodism Divided*, London.

A. Leon, 1968, *La Conception Materialiste de la Question Juive*, Paris『ユダヤ人と資本主義』波田節夫訳，法政大学出版会

C. G. Bolam, et al., 1968, *The English Presbyterians: from Elizabethan Puritanism to modern Unitarianism*, Beacon Press, London.

J. Goring, 1968, 'The Break-up of the old Dissent' in C. G. Bolam et. al., *The English Presbyterians*

H. L. Short, 1968, 'Presbyterians under a New Name' in C. G. Bolam et. al., *The English Presbyterians*

P. Mathias, 1969, *The First Industrial Nation*, Oxford University Press『最初の工業国家』小松芳喬監訳，日本評論社，1972年

杉山忠平，1974,『理性と革命の時代に生きて：J・プリーストリー伝』岩波書店（新書）

I. Sellers, 1976, *Nineteenth-Century Nonconformity*, London.
A. D. Gilbert, 1976, *Religion and Society in Industrial England*, London.
岸田紀，1977,『ジョン・ウェズリ研究』ミネルヴァ書房
M. R. Watts, 1978, *The Dissenters: From The Reformation to The French Revolution*, Oxford University Press.
W. D. Rubinstein, 1981, *Men of Property*, London
K. Honeyman, 1982, *Origins of Enterprise*, London.
山本通，1983,「後期イギリス・クエイカー派研究序説：クエイカー企業者史研究のための覚え書き（中）」『商経論叢』第 19 巻第 2 号
H. McLeod, 1984, *Religion and The Working Class in Nineteenth-Century Britain*, London.
A. Howe, 1984, *The Cotton Masters, 1830～1860*, Oxford University Press
M. W. Kirby, 1984, *Men of Business and Politics: the rise and fall of Pease Dynasty of North-East England, 1700～1943*, Allen and Unwin, London
F. Crouzet, 1985, *The First Industrialists: the problems of origins*, Cambridge,
J. Garnett, 1986, "Aspects of the Relationship Between Protestant Ethics and Economic Activity in mid-Victorian England", University of Oxford, Ph. D. thesis.
Ch. Cook, and J. Stevenson, 1987, *Longman Atlas of Modem British History*, London
浜林正夫，1987,『イギリス宗教史』大月書店
J. Garnett, and A. C. Howe, 1988, "Churchmen and cotton masters in Victorian England", in D. Jeremy, ed., *Business and Religion in Britain*, ldershot（England）.
D. Jeremy, 1990, *Capitalists and Christians: Business Leaders and Churches in Britain*, 1900–1960, Oxford.
山本通，1994,『近代イギリス実業家たちの世界：資本主義とクエイカー派』同文舘出版
M. R. Watts, 1995, *The Dissenters*, *Volume II: the expansion of Evangelical Nonconformity*, Oxford.
A. Tapper, 1996, 'Priestley on politics, progress and moral theology' in K. Haankonssen ed., *Enlightenment and Religion: radical Dissent in eighteenth century Britain*, Cambridge University Press
山本通，1996a,「イングランドの工業化と宗教」梅津順一・諸田實編著『近代西欧の宗教と経済：歴史的研究』同文舘出版，第 4 章
山本通，1996b,「イギリス労働者階級の生成と福音主義運動の展開：アレヴィー・テーゼをめぐって」神奈川大学評論叢書 7『社会史の魅力』所収
大西晴樹，2000,『イギリス革命のセクト運動：増補改訂版』御茶の水書房
M. Jacob, and M. Kadane, 2003, 'Missing, Now Found in the Eighteenth Century: Weber's Protestont Capotalist', in *Amerion Historical Review*, Vol. 108, No. 1.
山本通，2004,「M・ヴェーバーの『倫理』テーゼを修正する（下）」『商経論叢』第 40 巻第 2 号
N. Yates, 2008, *Eighteenth-Century Britain: religion and politics 1714～1815*, Pearson Education Ltd.
S. J. Brown, 2008, *Providence and Empire: religion, politics and society in the United Kingdom*, *1815～1914*, Pearson Education Ltd.
安元稔，2009,『製鉄工業都市の誕生：ヴィクトリア朝における都市社会の勃興と地域工業化』名古屋大学出版会
山本通，2010,「アングリカン広教主義における科学と社会：ジェイコブ・テーゼをめぐって」『商経論叢』第 45 巻第 4 号
湯沢威，2014,『鉄道の誕生：イギリスから世界へ』創元社
山本通，2014a,「ベンジャミン・フランクリンと産業的啓蒙：幸福のための改善」『商経論叢』第 49 巻第 2・3 合併号
山本通，2014b,「近世イングランドの宗教と教会：素描」『商経論叢』第 49 巻第 4 号